

Title	日中同形多義動詞「上がる(Agaru)」「上(Shàng)」の認知 対照研究:イメージスキーマ・ネットワークの分析
Author(s)	黄, 文蓮id;=1461
Citation	
Issue Date	2024-03
Type	Thesis or Dissertation
Text version	author
URL	http://hdl.handle.net/10119/18983
Rights	
Description	Supervisor: 橋本 敬, 先端科学技術研究科, 修士(知識科学)

概要

認知言語学は、言語使用者が身体的経験を通じて世界をどのように見ているかを重視し、その見方が言語表現に表れると考える。近年、対照言語学と認知言語学の交差分野である対照認知言語学の分野で、認知言語学的アプローチを取り入れた研究が増加している。特に、語義対照研究の中で、認知言語学の一部の認知意味論はメタファー的意味拡張プロセスや語の関連性など、意味拡張ネットワークやスキーマ構築の様々な側面を語の意味を研究している。認知意味論によれば、上下のような空間的な体験は、世界の認識とメタファーを含む言語表現において重要な役割を果たすとされる (Lakoff & Johnson: 1980)。人間の経験や身体体験に関わる単純なパターンのイメージスキーマは、メタファーの経験的基盤となる可能性がある (鍋島 2002: 79)。したがって、言語レベルの意味拡張ネットワークの分析に加えて、イメージスキーマ構築のような深いレベルの認知モードを反映するイメージスキーマ・ネットワークの探求は、異なる母語話者の認知の差を探求することに有効である。

本研究では、日中同形多義語「上がる」「上 (Shàng)」を対象とし、日中母語話者の認知の違い及びこの違いを説明できる要因を明らかにすることを目的としている。本研究では、言語レベルの意味拡張ネットワークの分析だけでなく、イメージスキーマ構築のような深いレベルの認知モードを反映するイメージスキーマ・ネットワークの比較に焦点を当てる。具体的には、日本語と中国語の同形多義動詞「上がる」と「上 (Shàng)」を事例として選び、これらの意味カテゴリー、イメージスキーマ、そしてそれらの拡張関係を包括的に分析する。イメージスキーマ・ネットワークの比較とその差の要因の考察を通じて、日中言語話者の認知・視点の違いを説明することが可能となるだろう。

本研究と同じく認知言語学の立場で日中対照研究を行う先行研究については主に意味拡張ネットワークの比較 (左 2007; 呂 2009 など) に留まっていた。そして、日中同形多義語「上」に関する先行研究をまとめた結果、以下の3点の問題点が明らかになった。①中国語の「上」は自動詞と他動詞で使用できるが、先行研究では中国語の「上」の品詞毎に分類せず、直接日本語の自動詞「上がる」と比較する傾向にある。②日本語の「上がる」「下がる」と中国語の「上」「下」の分類方法は基本的に辞書の例文を参考にして分析されているため、どの程度人間の生活と経験を反映しているかは疑問が残る。③これまでの日中対照言語学の研究は言語レベルでの意味拡張ネットワークを中心に分析し、日中の母語話者の認知的要因については考察が不足していた。

以上の研究背景と先行研究の不足に踏まえて、本研究は以下のリサーチ・クエスチョン設けた。

1. 日本語の「上がる」と中国語の「上 (Shàng)」のイメージスキーマ・ネットワークにはどのような違いがあるのか。

1-1 日本語の「上がる」と中国語の「上 (Shàng)」の意味カテゴリーはどのように分類されるか。

- 1-2. 日本語の「上がる」と中国語の「上 (Shàng)」の各意味カテゴリーにおける意味拡張のプロセス (メタファーやメトニミー) はどのようなものか。
- 1-3. 日本語の「上がる」と中国語の「上 (Shàng)」のそれぞれの意味カテゴリーのイメージスキーマはどのような特徴を持つのか。
- 1-4. 日本語の「上がる」と中国語の「上 (Shàng)」のイメージスキーマ・ネットワークはどのようなになっているのか。
2. 日中イメージスキーマ・ネットワークの違いの要因となる日中母語話者の事象把握の違いはどのようなものか。

本研究の方法として、まず日本語、中国語それぞれコーパスから「上がる」「上 (Shàng)」の例文を抽出し、日中辞書の意味カテゴリーを参考にしつつ「上がる」「上 (Shàng)」の意味カテゴリーを独自に分類した。続いて、「上がる」「上 (Shàng)」の各意味カテゴリーの拡張義の拡張プロセスについて、現象素を持ちいて分析し、最後に、これらのイメージスキーマを分析してイメージスキーマ・ネットワークを描き比較した。具体的な手順は以下のように9つのステップで行う。

1. 例文の用意
2. 意味カテゴリーの分類
3. 現象素を用いた各意味カテゴリーの意味の詳しい分析
4. 現象素の比較による意味拡張の分析
5. 意味ネットワークの作成と比較
6. 各意味カテゴリーのイメージスキーマの作成
7. スキーマティック・ネットワークモデルの分析
8. 日中イメージスキーマ・ネットワークの作成と比較
9. イメージスキーマ・ネットワークの差の要因となる日中母語話者の認知の差の分析

以上の手順で分析を行った結果、RQ1.1に対して、「上がる」の意味カテゴリーは「上に移動する」、「水の中から陸に移動する」、「目上の人の所に行く」、「部屋などに入る」、「数値が大きくなる」、「価値が高い状態になる」、「気持ちが高まる」、「緊張する」、「続いていた状態が終わる」、「(物理・抽象な) 声が出現する」という10種類が分類出来る。「上 (Shàng)」の意味カテゴリーは「上に移動する」、「トイレに行く」、「交通機関に乗る」、「ある数量、程度に達する」、「困難に対処する」、「規定の時間に経常的な活動をする」、「人前の空間に出」、「記事やリストに載る」という8種類が分類できることを明らかにした。

RQ1.2に対して、日本語の「上がる」が生じたそれぞれの意味カテゴリーの拡張プロセスの数について、日本語の「上がる」は5つのメタファー的拡張をして、メトニミー的拡張は3つである。メタファー的拡張やメトニミー的拡張同時に生じたものは1つがある。中国語の「上 (Shàng)」が生じたそれぞれの意味カテゴリーの拡張プロセスの数について、中国語の「上 (Shàng)」は4つのメタファー的拡張をして、メトニミー的拡張は2つである。メタファー的拡張やメトニミー的拡張同時に生じたものは1つがある。メタファーやメタファー的拡張の数からみると、日本語の「上

る」は中国語の「上 (Shàng)」よりどちらの方も多。メタファー的拡張やメトニミー的拡張同時に生じたものは同じく1つがある。

RQ1.3 に対して、「上がる」と「上 (Shàng)」の各々イメージスキーマ・ネットワークは同じく「物理空間」、「物理・抽象空間」、「抽象空間」が分けられる。「上がる」の「物理空間」イメージスキーマの中は「陸の空間」、「部屋の空間」が考えられる。「物理・抽象空間」の中は「目上の人がいる空間」が考えられる。「抽象空間」の中は「値的空間」、「気分的空間」、「時間的空間」が考えられる。「上 (Shàng)」の各々イメージスキーマ・ネットワークの結果から、「上 (Shàng)」のスキーマは「物理空間」、「物理・抽象空間」、「抽象空間」が分けられる。「物理空間」の中は「陸の空間」、「部屋の空間」が考えられる。「物理・抽象空間」の中は「目上の人がいる空間」が考えられる。「抽象空間」の中は「媒体につける空間」、「困難がない空間」、「公的空間」が考えられる。

RQ1.4 に対して、「上がる」「上 (Shàng)」イメージスキーマ・ネットワークを比較した結果、日中の拡張義のイメージスキーマには同じ点と異なる点があることが分かった。同じく「物理空間」、「物理・抽象空間」、「抽象空間」のイメージスキーマがある。例えば、「部屋などに入る」「交通機関に乗る」という意味カテゴリー実は同じく物理空間の移動が見られて、イメージスキーマは同じである。異なる部分として、「上がる」は「気分的空間」のイメージスキーマが特徴的であり、「上 (Shàng)」は「公的空間」のイメージスキーマが特徴的であることが分かった。

RQ1 に対する結果を見ると、日本語の「上がる (Agaru)」は「気分的空間」のイメージスキーマが特徴的であり、中国語の「上 (Shàng)」は「公的空間」のイメージスキーマが特徴的であることを分かった。RQ2 に対して、この日本語で特徴的なことについて、日本語母語話者は自分が環境に融合して、自身の感情的な気分を重視するような主観的視点で物事を捉える傾向があることが考えられる。これは認知言語学における「主観的実態把握 (Subjective Construal)」に当てはまるのではないかと考える。その一方、中国語母語話者は「公的な状態に出る」のような客観的な視点（第三者視点のようなもの）、認知言語学における「客観的実態把握 (Objective Construal)」で物事を捉える傾向があり、日本語母語話者より比較的客観的な視点で捉える傾向があることが考えられる。これは応用言語学における日中翻訳の対照研究（徐 2011; 鄔 2018）が示した特徴、すなわち、日本語母語話者は「主観的事態把握 (Subjective Construal)」を好む傾向があり、中国語母語話者は「客観的把握 (Objective Construal)」を好む傾向がある、という知見と一致している。本研究は言語の裏にある認知に関するこのような新たな知識を生み出し、それに加えて、言語学の側面から異なる母語話者の認知を比較する方法論、つまり二つの言語の話者の裏にある認知の違いを考察するための体系的な方法を提案したという貢献がある。